

伊丹福音ルーテル教会 聖霊降臨後第八主日礼拝のしおり

2021年7月18日

前奏：

招きのことば：詩編 23 編:1-4, 6 節

【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしをカづける。

命のある限り 恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り 生涯、そこにとどまるであろう。

罪の悔い改めと赦しのことば：

会衆： 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。

私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師： 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。

生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、かぎりなきいのちを信ず。 アーメン。

祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も共に礼拝にあずかり、あなたの御言葉をいただいて一週間を始めます。あなたはまことの羊飼いとして、さまよう羊のような私たちに御言葉によって信仰を与え、強めてくださいます。今朝もあなたの赦しをいただき、新たにいのちをいただきます。そして、ここから私たちの新しい一週の歩みが始まります。

あなたは日常生活を離れて御言葉を聞くために集う私たちを、新たないのちで満たしてここから送り出してください。あなたはまた私たちの日々の生活の現場に共にいてくださり、私たちを導き支えてくださいます。日常生活の中でこそあなたは私たちを導き、あらゆる災いから守り、隣人の力になるように鍛え用いてくださいます。

新型コロナ・ウィルスの感染が拡大しています。緊張感を保ちながら、その中でも御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして安心して生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

使徒書朗読：エペソの信徒への手紙 2章 11-22節

だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。また、そのころは、キリストとかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

福音書朗読：マルコによる福音書 6章 30-34, 53-56節

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行行って、しばらく休むがよい」

と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた・・・

こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床(とこ)に乗せて運び始めた。村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

讚美歌 242 番

1. 「悩む者よ 我に来よ」と、恵の主は 招きたもう
重荷負いて あえぐ友よ 主のみもとに 来たり 憩え
2. 「悩む者よ 我に来よ」と、光の主は 招きたもう
暗き道に 迷う友よ、主のみもとに 急ぎ帰れ
3. 「悩む者よ 我に来よ」と、救いの主は 招きたもう
罪を悔いて 嘆く友よ、主の赦しの御声 聞けや **アーメン**

説教：「あなたがたが食べ物を与えなさい」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

イエス様は弟子たちに、しばらく休むがよい、と言われました。食事の暇もないほど、忙しい日々が続いたからです。弟子たちはイエス様とともに方々を巡り歩いていました。そして時が来て、二人ずつの組になって助け合いながら村々を訪ねて、悔い改めを説いてまわるようにとイエス様の使命を帯びて遣わされました。本日読まれたマルコによる福音書 6 章 30 節には、使徒たちがイエス様のところに帰ってきて、それぞれ旅の報告を詳しくしています。その間もたくさんの人々がイエス様のところに入出入りして、イエス様も弟子たちも食事の暇もないほど、ずっと忙しくしていたのです。それでイエス様は、場所をかえて、人里離れたところへ行ってしばらく休むようにと言われました。

さて、休むのが苦手な人が多いですね。休む、というのはどういうことでしょうか。安らいで、慰められ、リフレッシュして、心も体も再び新たにされて元気になることです。弟子たちはイエス様に「あなたがただけで人里離れたところへ行ってやすむがよい」と言われましたが、続きを読んでもイエス様は弟子たちと一緒にいてくださいます。人里離れたところ、ということばは同じマルコによる福音書の 1 章 35 節にも出てきます。そこには、イエス様は朝早くおきて、人里離れたところに出て行って、そこでお祈りをしておられたと記されています。イエ

イエスが弟子たちを人里離れたところに行くように勧められたのは、忙しい日常の働きから離れてお祈りをするため、イエス様とともにいる時間を持つことの大切さを教えられたということです。休む、ということはほかの何もせず祈ること、イエス様と共にいることです。それは、み言葉をいただいて、祈ること、日常の様々な気遣いや手のわざをしばらくだけ離れて、神様の前に憩いを得、安らいで、それによって新しい元気をいただくことです。そうだとすると、イエス様がおっしゃっている休みとは、毎週の主日礼拝のことですね。弟子たちはそれぞれの働きからしばらく解放され、一緒に忙しい日常を離れてイエス様と豊かなときを持ちました。私たちにしても本当に「休むこと」は何もしないでぼーっとすることだけではなくて、日常と違う別のことをする、ということでもなくて、ひとりになるのもなくて、共に日常を離れてしばらくイエス様と豊かな時を過ごすこと、主イエス様のみ言葉の語られるところに一緒に集い、共に祈ることです。礼拝に来るのは「休み」に来ているのです。

遊ぶことを日本でもリクリエーションといいます。このリ・クリエーションという言葉は、新しく再び造られること、再創造されるという意味ですね。神様が私たちを造ってくださいました。そして私たちは日常を離れてすべての重荷を主イエス様のもとに降ろして再創造されます。罪の赦しをいただいて、新しいいのちをいただきます。このようにリフレッシュされて一週間の歩みのために整えられ、ここから日常生活に派遣されることがほんとうのリクリエーションです。

これは生活の秩序の中に入れておくこと、私たちに必要なことです。礼拝に集うことを大切にしましょう。礼拝の第1の意義は、人里離れて休むことだと覚えましょう。忙しくて疲れたからこそ、休むために集いましょう。暇だから集うというよりも、むしろ忙しい日常だからこそ、水泳選手の息継ぎのように、また音楽家が楽器を休ませたり調弦したりするように、ここでしっかり息継ぎをして、酸素と栄養を得て、疲れをいやし、心癒されて、過酷な新しい一週備えましょう。

私たちの神様は安息の神様です。聖書の最初にある創世記1章と2章を見ると神様は天地を7日間で創造されたと記されていますが、実際の仕事は6日間で完成されて、第7日目は「ご自分の創造の仕事を離れて安息された」ということでした。6日間で仕事が完成したことを振り返って喜ぶ一日が、スケジュールの中に最初から大切に組み込まれています。安息の日、休みの日があって一週間となったのです。神様は安息の日を祝福して聖別されました。十戒に安息日を覚えてこれを聖としなさい、と命じられています。聖とすること、聖別すること、というのは、とっておくこと、リザーブしておく、ということです。私たちも一週間の働きを考える時、まず第1に礼拝に集うことをリザーブして確保しましょう。時間が余って礼拝に来る余裕があったら参加するというのではなくて、まず私たちに必要な休みのとき、つまり礼拝の時間を確保すること、他の予定をいれずにとっておくことが「聖別する」ということです。一週のわざを振り返り、神様の恵みを感謝をし、自分の不完全で自己中心だった罪を悔い改めイエス様の赦しを得てみましょう。忙しい弟子たちがイエス様とともに人里離れたところに行ってしばらく休んで、すぐ人々を助ける働きにたずさわったように、私たちも礼拝でリフレッシュされて、鋭気を養われて、元気に新しい一週間に礼拝から遣わされていきましょう。

さて、弟子たちはイエス様とともに小舟に乗って人里離れたところに行きました。ところが人々はそれに気づいてほうぼうの町から誘い合わせて出てきて、舟の到着先に先回りしてイエス様の一行の到着を待ち受けました。イエス様は岸边に集まった大勢の群衆をご覧になりました。6章34節には、イエス様は人々をご覧にな

ったとき、「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れんでいろいろと教え始められた」と記されています。「飼い主のいない羊のような有様」というのは、的を得た言葉ですが、突然前後の文脈なく人々を羊に例えているのは不思議なことではないでしょうか。

旧約聖書に「飼い主のいない羊のような有様」のことが 2 か所に出てきます。私たちには不思議に思えるのですが、マルコの福音書ではイエス様が群衆をご覧になったとき、みんなのよく知っていた旧約聖書のエピソードが重ねられているのです。

一つ目は旧約聖書の民数記 27 章 17 節です。モーセはエジプトから奴隷だった民を脱出させて自由にし、そのあと 40 年間荒野での生活を導きました。いよいよ使命を終えて世を去るときが近づいたとき、モーセは民が指導者を失って羊飼いのいない羊のようになることを恐れて祈りました。そこでヨシヤという後継者が民のいわば羊飼として立てられました。

旧約聖書のもう一か所は、モーセからずいぶんときがたったときのイスラエルの姿を表している個所です。エゼキエル書 34 章です。エゼキエルはイスラエルが隣の大国のバビロンに打ち負かされて捕虜になったとき、その一人としてバビロン帝国に連れていかれた預言者です。そのときイスラエルの民は羊飼いのいない羊のようになっていました。民は散らされ、獣の餌食となっていました。当時のイスラエルの民の指導者たちは、羊の群れを養おうとはせずに、むしろ羊を食物にして自分たちが肥え太っていきました。羊は弱い動物です。羊飼いは羊に食べ物を与え、弱ったり、病にたおれたとき一頭一頭に細かい配慮をもってお世話をします。羊は迷いやすい動物です。羊飼いは羊が迷わないように杖をもって導きます。しかし、民の指導者たちは羊を養わず、力づくで思いのままに振り回し、病の羊を放っておき、迷った羊を散らしたままにしていたので羊は獣の餌食となりました。預言者エゼキエルはこのような「羊飼いのいない羊のような有様」の民のために、神様が自分でご自分の羊を探し出して世話をすると預言しました。「わたしは彼らのために 1 人の牧者、羊飼いをおこして彼らを牧させる。わたしのしもべダビデである」と 34 章 23 節に言われています。救い主である羊飼いをダビデの子孫から送り出すことを神様が約束されました。

マルコによる福音書 6 章 34 節で「群衆を見て飼い主のいない羊のような有様」をイエス様がご覧になって深く憐れまれた、というのは、このように旧約聖書で約束されていたまことの羊飼として、救い主イエス様が来てくださったことが示されているのです。

今日読まれた後半の、53 節以下のところでは人々はイエス様のもとにたくさんの病人を連れてきています。イエス様は十字架でご自分の命をかけて、私たちが悪魔の餌食にならずに罪の赦しを得て新しい命に歩むことができるように、身を挺して救ってくださいました。神の御子イエス様ご自身が人となって私たちのかわりにきよい人生を生きて、私たちのかわりに罪の罰をうけて血を流してくださったのは、イエス様が世の罪を取り除く神の小羊となってくださったということでした。

イエス様はご自身の血をもって買い戻してくださった羊を、飼い主として、羊飼いとして、牧者として守り導いてくださいます。教えをもって人々を養い導き、病気の人、悪霊に取り憑かれている人を助け、そしてご自身の身を挺して獣から羊を守り通されるのです。イエス様によって私たちは、豊かな食べ物、飲み物のあるところに連れて行っていただいてよい草をはむことができるように養っていただきます。み言葉によって養われます。日常生活の中で弱っていても、病気になって立ち上がることができなくなっても、いろんな人生のピンチになっても、イエス様は私たちを決してお見捨てになることはありません。私たちはイエス様のもとで十分な休みと安らぎを得て、傷が包まれ、病が癒されて、再び立ち上がる力をいただきます。道に迷ってしまうことがないように、そのようにして獣の餌食になることがないように、イエス様は私たちを身近におき、ふところに抱き、乳を飲ませて優しくまっすぐに導いてくださいます。

私たちの救い主イエス様は、よい羊飼い、飼い主、牧者としておいでくださったことを感謝しましょう。飼い主のいない羊のような有様である群衆を深く憐れまれたイエス様はまた、羊のような自分で自分を養うことができない私たちを養ってくださいます。傷つきやすく病いに苦しめられて、だまされやすく迷いやすい私たちを、癒し、強め、獣から守ってくださいます。

イエス様は、弟子たちを信頼して働きを託されました。群衆はイエス様と弟子たちを追って、人里離れたところに先回りしてきていましたので、時間が遅くなると食事の用意のないことに気付きました。その数、男の人だけで5000人というおびただしい群衆がそこにいました。弟子たちはイエス様に人々を解散させて自分で食べ物を獲得させたらどうですか、と提案しました。イエス様は驚くべきことに弟子たちに「あなたがたの手で食べ物を与えなさい」と言われました。結局、イエス様が二匹の魚と5つのパンを割いて弟子たちに与えてくださったので、弟子たちは人々のもとに持ち運ぶ使命を果たしたのです。私たちの一週間は、「あなたがたの手で食べ物を与えなさい」と言われたイエス様に日常生活に遣わされています。でも私たちは知っています。イエス様が羊飼いです。イエス様が私たちを養い、癒し、守ってくださいます。このイエス様の恵みと祝福を、私たちは今週も人々に分かち合いながら日常生活を営んでいきます。食べた人が満腹になって満足するような、豊かな一週間を過ごせるように、羊飼いであるイエス様に信頼して使命に生きましょう。

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。」マルコ6:41

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン

讚美歌：280番 献金 献金感謝の祈り

1. わが身の望みは ただ主に かかれり 主イエスのほかには 依(よ)るべき方なし

※我がきみ イエスこそ 救いの岩なれ 救いの岩なれ

2. 風いと激しく 波立つ 闇夜も みもとに碇(いかり)を 降ろして やすらわん ※
3. この世の 望みの 消えゆく ときにも 心は動かじ みちかい 頼(たの)めば ※
4. 見ぬ世に移りて 見(まみ)ゆる その時 主の義をまといて 御前(みまえ)に 立たまし ※
アーメン

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。
みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。
われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。
われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讃美歌 543 番

主イエスの恵みよ 父の愛よ 御霊の力よ ああみ栄えよ アーメン

祝福の言葉

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき
お交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、
豊かにありますように。アーメン

後奏